
天空のエトランゼ～脳髓の微笑み編～

dig

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空のエトランゼ／脳髓の微笑み編

【Nコード】

N8198X

【作者名】

dig

【あらすじ】

あの日、彼女は自殺した。

嬉しそうに、

楽しそうに…。

それが、すべての幕開きだった。

天空のエトランゼ

学園情報倶楽部編スタート！

呪われた序幕

夕陽が沈む。

まだ興奮さめやまず、ざわつく人混みの向こうで、救急車が正門を出ていく。

先程昇ったと思ったのに…。

輝は、夕陽の最後の輝きに目を細めた。

「チッ」

柄にもなく、高坂は舌打ちすると、逆光の中からやっと姿を目視することのできたみどりのもとに、一步一步路上を踏み締めるように、歩いていった。

「あつ、先輩…」

高坂に気づいた緑は、肩を1人の生徒に貸していた。

その生徒の名は、柳川梓。

今さっき、飛び降りた佐伯良子と同じ…演劇部の部員だった。

梓の顔は悪く、軽く嗚咽していた。

仕方があるまい。

親友の良子が、飛び降りるのを見てしまったのだから。

「すまない」

高坂は、由妃に頭を下げた。

「助けられなかった」

情報倶楽部は、梓から、良子のおかしいから、見張ってほしいと依頼を受けていたのだ。

しかし、情報倶楽部は守ることができなかった。

「先輩……」

そんな高坂の姿に、緑も顔を伏せた。

「部長！」

自殺現場である屋上から降りてきた輝が、小走りで近づいてきた。

高坂はその声に気づかないのか、頭を下げたまま動かない。

息を切らしながら、輝が高坂の横に立った。

「部長、どうします。これは予想外の展開ですよ。まさか、のっけから…飛び降り自殺なんて」

「自殺ではない！」

いきなり、高坂は頭を上げると、かつと目を見開き、強い口調で否定した。

「彼女は、殺されたのだ」

「え！？一体、誰にですか！僕は近くから見てましたけど、彼女は自分から、飛び降りましたよ」

輝は目を丸くし、屋上を見上げた。

高坂はただ、そんな輝を睨むだけで、答えない。

「また、何の根拠もないんですか！」

少し呆れてしまう輝。

「まったく…」

大きくため息をつこうとした瞬間、沈黙を破るかのように、鋭い声が飛んだ。

全員の間に、考える為の沈黙が訪れる。

しかし、誰もその答えを得ることはできなかった。

沈黙というものが大嫌いな輝は、間を壊す為に、ぼりぼりと頭をかいた。

「しかし…人が死ぬって時に、撮影ですか。新聞部ってやつは…たく、どういう神経してるんだか…。あんたらは、人間ですか？平然ととれるなんて、信じられませんよ」

ぎろつと、輝はさやかを睨んだ後、そばにいた緑の背中に隠れた。

さやかはそんな輝を、真正面に見据え、

「あたし達は、人間よ。だけど、起こったことの真実を残しておく義務があるの。冷静に、沈着に、真実をとらえる義務がね」

さやかは、良子が飛び降りた校舎を見つめ、

「今回の自殺は、とてもおかしい臭いがした。確かに、彼女はとても上手く笑っていたわ。まるで、彼女自身が笑っているようにね！」
さやかは再び、輝に視線を移し、

「だけど、あれは演技よ。とても臭い演技よ。自殺という名の演技。彼女は、誰かに操られていたのよ！何者かに、仕組まれてね！」

さやかの悲痛な声が、彼女の心の内を示していた。

「影で、糸引く…誰かがいると？」

みどりは、泣き続ける梓を抱き締めながら、呟いた。

「何者？フツ…者とは限らんかな」

高坂は、不気味に笑った。

そして、さやかを見つめ、

「そうんだろ？なぜならば、ここはブルーワールドだからな」

きいた。

さやかは声には出さずに、肩をすくめて見せた。

「さやか…。これから、どうするつもりなんだ」

「この映像を解析してみるつもり。あまり、気分がいいものではないけど」

「そうか。多分、お前のかんは当たっているだろう。この件は、急を要するぞ」

「わかっている。明日の放課後までには、分析を終わらせる。新聞部の第二室で、発表するから」

「了解した」

高坂が頷くと、さやかは踵を返し、クラブ校舎の方へ消えていった。

「頼んだぞ」

いつのまにか、辺りは真っ暗になっていた。

高坂は、まだ泣いている梓の姿を心配そうに見つめると、ぎゅっと拳を握り締めた。

加速

大月学園。防衛軍によりつくられたこの学園は、普通科以外に、戦
士育成科などがある。所謂、軍事学校に近かった。

東館、中央館、西館と言われる校舎を中心に、グラウンドの向
こうにクラブ校舎があった。

今は、廃墟と化している特別校舎が北側にあり、西には、体育館と
食堂があり、その裏には、図書館があった。

ちなみに体育館の端から、図書館の角に、情報倶楽部の部室が地下
にあった。

事件の次の日。

高坂と緑の2人は、午後の授業が終わると、一目散にクラブ校舎に
向かった。

入り口から、真っ直ぐ廊下を突っ切ると、巨大な鉄の扉にぶつかる。

その扉の向こうこそ、難攻不落と言われる。大月学園新聞部の第二
部室がある。

普段なら、銃弾も魔法も跳ね返す鋼鉄の扉も、今日は簡単に開いた。
中に入ると、20畳くらいの部屋が広がっていた。

レトロ主義の部長の趣味か、奥には暗幕が下ろされていて、現像室がつくられていた。

それ以外…変わったところはない。

高坂は何もない部屋の右側の壁に近付くと、そこから三步下がり、床を足でコンコンと叩いた。

すると、下からも同じようにコンコンと音がかえってきた。

どうやら、床の下は秘密の抜け穴になっているようだ。

今度は、タップダンスのようにリズムを刻むと、それが合図らしく、床の一部がスライドし、階段が現れた。

「こちらへ、どうぞ」

階段から、1人の男が顔をだし、すぐに消えた。

「失敬」

高坂から、階段へと滑るように飛び込んだ。

階段というよりも、梯子に近い。

2人は、それをつたって、下に降りて行った。

「あんまり、深くないんですね」

高坂の次に、降りた緑は、足元を確かめた。

一応、板が引いてあるようだ。

「行くぞ」

高坂は一步前に出ると、手のひらを前の空間に添え、ゆっくりと前に押した。

どうやら、扉があったようだ。

闇から、目映い程の光で溢れた空間に、2人は目を細めながら入った。

中は、上の部室の二倍くらいの広さがあった。

この空間は、地下二階に相当する深さにあった。

そんなところに、こんな場所をつくったのは、さやかの仕事だった。

勿論、学校側には内緒である。

どこから電力を供給しているのは、明々としている照明の下、ずっと並んでいるパイプ椅子には、いろんなクラブの幹部達が、もう座っていた。

それも、ただのクラブだけではない。

高坂は、椅子の隙間を這うように進むと、一番前の席にどかっと腰を下ろした。

仕方なく、緑は遠回りをして、前に出ると、高坂の隣に座った。

周囲は異様な…殺気に似た空気が漂っていた。

照明の強さの為だけではなく、ムシムシした熱気が、すぐに肌をべとつかせた。

「それにしても、すごいですね。これだけの影の部長が集まるなんて…」

緑は、感嘆の声を上げた。

「まあな。影の部だけで、50くらいあるからな」

高坂は、軽く後ろを向くと、人々の顔を確認した。

「しかし…」

高坂はフツと笑うと、前を向いた。

「後ろのやつらより、今から来るやつの方が、怖いよ」

突然、椅子に座る部長達に緊張が走った。

いつのまにか…高坂達の前に、1人の女が立っていたのだ。

すらっとした長身の女が、満面の笑みを浮かべながら。

その女の名は、如月さやか。

新聞部部長である。

「皆さん。今日集まってもらったのは、他でもありません。昨日起こった自殺という名の殺人について、これからの対策を考えて頂きたいからです」

横五メートル、縦四メートルくらいのスクリーンのそばにあるプロジェクターの横に立ったさやかは、手にマイクを持ち、集まった生徒達に向かって話しかけていた。

「それでは」

さやか、続けて言おうとした瞬間、

「下らん！」

激しい音を立てて、パイプイスから1人の男が立ち上がった。

「何がくだらないのですか？未確認生物愛好会部長」

笑顔を向けながらも、さやかのこめかみが、ピクツと動いた。

未確認生物愛好会部長は、鼻で笑うと、

「自殺の一つや二つで、我々がなぜ集まらなくてもならないのだ！」

少し声をあらげ、

「確かに、この世界で、人が自ら死ぬのは珍しい！しかしな！そんなどこにでもいる女という生物が、死んだくらいで、なぜぎゃぎゃ騒がなくてもなんのだ！我々は、今！忙しいのだ！昨日やっと、新たな未確認生物の動画が送られてきたのを解読せねばなんのだ！や、やつは魔物ではなく、伝説の妖怪かもしれないのだああ！」

妙に興奮する部長。

「お、女が死んだくらいだとお」

さやかがキレて、変貌する前に、一番前にいた緑がかばっと、立ち上がると、未確認生物愛好会部長を指差した。

「てめえ！人が、1人死んだんだぞ！それを下らないだと！」

「そうだ。あいつらは、女の良さを知らない」

ホスト倶楽部部長が、フツと笑った。

「彼女は殺されたんだぞ！」

緑が叫んだ。

「誰に殺されたというんだ？」

未確認生物愛好会部長は、伊達眼鏡を人差し指で上げた。

「そ、それは…」

口ごもる緑を見て、勝ち誇ったように、未確認生物愛好会部長は言った。

「答えられる訳がない！彼女は自分の意思で、死んだかのだからな！それともなにかい？彼女は、誰かに操られて死んだともいうのかい！そんな非現実的な…」

未確認生物愛好会部長は、最後まで、言葉を発することはできなかった。

さやかの手刀が、未確認生物愛好会部長の首筋に叩き込まれていたからだ。

「非現実的って…じゃあ、あんたらの部は一体何なのよ」

そんな騒ぎの中でも、高坂だけは動じず、一枚の写真をじっと見つめていた。

「うーん」

顎に手をあて、少し考え込んだ後、徐に興奮している緑の方を向いた。

「緑」

しかし、緑は気付かない。

高坂は軽く肩をすくめると、制服の胸元からカードを取り出した。

「舞。すまないが、すぐに調べてほしいことができた」

「何ですか？」

カードから声がした。

「有無。自殺した佐伯良子の家の様子を…別に、家族を調べなくてもいい。家の表札を確認してほしいんだが」

「表札？それくらいでしたら、御安いご用ですよ」

舞は情報倶楽部の部室の中でにやりと笑うと、監視式神を移動させた。

「…緑」

高坂はカードをポケットにしまうと、興奮さめやらぬ緑の方を見た。

「何です！」

ぎろつと高坂を睨んだ緑は肩で息をし、目が血走っていた。

「な、何でもない。あとでいい」

緑の迫力に負けた高坂は、彼女が視線を外すと同時に、胸を撫で下ろした。

「やれ…やれ…」

高坂はまた、写真に目を落とした。

それは、演劇部の写真だった。

梓から、預かった写真。

そこに写っているのは、演劇部全員の集合写真。

高坂は、写真に目を細めた。

2ヶ月前の舞台発表後の打ち上げの様子が、写っていた。

そう写っていた。

「何見てるんですか？」

未確認生物愛好会部長との不毛な争いに疲れた緑が、席に座ると、

高坂の持つ写真を覗き込んだ。

「演劇部の写真じゃないですか。これが何か」

「…」

香坂はすぐに答えず、少し躊躇ってから、

「昨日と少し違う」

と呟くように、言った。

「え？」

緑は、香坂の顔を見た。

「少しの差だが…」

そう…それは、ほんの少しの違いだった。

右端に写っている佐伯良子の足が、地面から浮いていたのだ。

地下にある会議室で、各倶楽部の代表者の話しあいが行われている時、輝は会議室から離れた体育館の近くの木陰に、身を潜めていた。なぜ、そんなことをしているのかと言うと…高坂の命で、柳川梓の護衛をしているのであった。

今回の騒動で廃部になることが決定した演劇部だが、梓のような熱心な部員もいて、何とか部を継続させようとしていた。

体育館の角を使って、1人練習していたが、終わったらしく、奥で着替えをしているようだった。

あまりじろじろ見る訳にはいかなないので、輝は木にもたれながら、時間を潰していた。

「遅いな…」

もう15分経っている。

いくら何でもかかり過ぎではないのか。

輝は意を決して、木々の間から飛び出した瞬間、空を切り裂くような甲高い女の悲鳴が、聞こえた。

「柳川さん！」

輝は、走った。

着替え中でもない。

体育館に飛び込むと、奥のロッカールームに走った。

「大丈夫！」

扉を開けた瞬間、輝は凍り付いた。

なぜなら、中にいたのは、梓ではなかったからだ。

「きゃああああ！」

まだ着替え途中の女は、いきなり扉を開けた輝に気付き、さっきよりも大きな悲鳴を上げた。

「え？」

輝の目が、点になった。

輝は、単なる覗きになってしまったところだったが、悲鳴に気づいて、輝の後ろに来た梓が事情に気付き、慌てて扉を閉めた。

「あっ」

その後、何とか…輝のことを庇ってくれたから、捕まることはなかったけど。

教室で着替えていた女の名は、伊集院優姫。

梓と同じ、演劇部の部員だ。

繊細そうで、壊れやすい…そんな感じがする女だった。

輝が、伊集院に平謝りしている時、高坂の持つ写真に、また変化が現れていた。

ただどすぐには、高坂も緑も気づかなかった。

左端に写る伊集院の首筋に、二つの傷が出来ていたことに。

「何!?!」

数分後…高坂は、写真の新たな変化に気付き、席を立った。

「それでは、今から…昨日の事件の瞬間を」

それは、さやかが、映像を流そうとする時だった。

高坂は席から離れると、プロジェクターからの映像を遮った。

スクリーンに、高坂の影が映った。

「高坂!」

さやかは怒声が、会議室に響いたが、それを無視して、スクリーンに背を向けると、高坂は走り出した。

「緑！お前は見ておけ！」

再び、各部長が座っている席をかき分けて、高坂は来た道を戻る。

途中、写真を取りだし、確認した。

「チツ」

高坂は扉を開けると、階段に手をかけた。

「輝！そいつから離れろ」

そんな高坂の声が、輝に届く訳がなかった。

「す、すいません！」

女子の着替えを覗いたという罪悪感が、必要以上に輝に頭を下げさせた。

「もう大丈夫だから、一応事故なんだし」

梓が、必死に庇ってくれたが、よっぽどショックだったのか…教室

の角で、伊集院は制服で体を隠したまま、震えていた。

その様子を見た梓は、土下座状態の輝に近づき、

「ごめんね。ちゃんと説明しておくから」

外に出るように促した。

「う、うん」

輝は立ち上がると頷き、ふらふらと歩き出した。

「やつぱ…まずいよな」

頭から消えない伊集院の下着姿に、輝はため息をついた。

その時、またそれは響いた。

「きゃああああ！」

また悲鳴が、ロッカールームから聞こえてきたのだ。

「えー！」

驚き、思わず足を止め、振り向こうとしたが、先程のトラウマが、輝の足をふらつかせた。

すぐに走れない輝の上を、一陣の風が吹き抜けた。

その風は、扉を突き破り、輝の向こうに着地した。

「え？」

驚き、振り返った輝の目の前に、気絶した梓を抱えた伊集院が立っていた。

「え？」

輝はその人間離れた跳躍力よりも、梓を抱える伊集院の下着姿に再び目を奪われた。

その為、さらに大事な部分を見落としてしまった。

「お、お、お、お」

声にならない声を上げる輝は、どうしたらいいのかわからない。

そんな輝を見て、伊集院はフツと笑うと、再びジャンプし、体育館の屋根近くの窓ガラスを突き破ると、外に消えた。

「お、お、お」

まだ震えている輝を動かしたのは、バイブにしていたカードであった。

胸ポケットにしまい、乳首に当たるようにしておいたカードの刺激で、我に返った輝は、カードを取り出した。

「輝！無事か！柳川さんは、大丈夫か？」

高坂の声が聞こえてきたが、まだ輝の手は震えていた。

「いいか、輝！よく聞け！柳川さんと、同じ演劇部の伊集院優姫には、近づくなよ！理由は、まだ説明できないが…」

「む、無理です…」

やっと絞り出した輝の声は、震えていた。

「どうした！輝！何があった！」

「む、む、無理です！近づくなんで、できません！」

輝は絶叫した。

「し、下着姿の女の人に近づけません！」

「え」

高坂の言葉が、止まった。

「ち、違った！違ったんですよ！ビキニとは！すべてが、何もかもが！」

「…」

高坂は、無言になった。

「もうどうでもいいです。さっきのは、向こうから見せに来たんですから！犯罪ではないですよね！」

輝は興奮していた。

「ビバ！下着！」

と叫んだ瞬間、高坂は携帯を切り、指をこめかみに当てた。

「どうにかならんのか…あいつは」

頭を抱えてしまった高坂が、ため息をつこうとした瞬間、影が頭上を通りすぎる気配を感じた。

「！？」

咄嗟に、真上を見上げた高坂の目に、梓を小脇に抱えて、空を飛ぶ…下着姿の伊集院の姿が飛び込んできた。

「何！？」

まるで、空中を走るように飛んでいく伊集院は、学園を囲むフェンスを飛び越え、外に消えた。

見えなくなる一瞬、伊集院は高坂を見た。

不敵に笑う唇の端から、鋭い牙が出ていた。

「くそ」

高坂は、額に冷や汗が流れるのがわかった。

見えないもの

「お姉様の為ならうえんやこら」

鼻歌混じりでクラブ校舎を出たのは、新聞部部員矢島梨々香であった。

梨々香は、東校舎側にある自転車置き場に向った。

そこに置いてある錆び付いた一台の自転車にまたがると、再びクラブ校舎に戻り、その裏にある隠し門から外に出た。

基本的に、この学園は全寮制であるが、一部近くに家がある者は、自宅から通うことが、許されていた。

佐伯良子もその1人だった。

地図を片手に四苦八苦して、やっと辿り着いた佐伯の自宅の表札を見て、梨々香は愕然とした。

「え？」

表札に…良子の名前がない。

子供の名前はのせないのかとも思ったが、弟と妹の名前は、ちゃんとあった。

梨々香は周りを見回すと、一件の煙草屋を見つけた。

お婆さんが一人でやっている小さな店の前に自転車を停めると、梨々香はカウンターに近づいた。

「おばちゃん、煙草一つ下さいな」

にこにこ笑顔を浮かべながら注文した梨々香を、お婆さんはぎろつと睨み、

「あんた、未成年じゃろ」

「ただのお使いですよ。父親から頼まれまして。無理だと言ったんですけども〜はあ〜」

白々しくため息をつき、肩を落とす梨々香を見て、もともと気が優しい人なのか…お婆さんは、そつと辺りを伺いながら、煙草を差し出した。

「今回だけだからね。あんたの顔！覚えておくからね」

「ありがとう。素敵なお姉さん」

また白々しく言つと、梨々香は笑顔でお金を渡した。

「ところで、綺麗なお姉さん。ききたいことが、あるんだけど。この近くにある佐伯さんちって、あるでしょ？」

「ああ、よく煙草を買ってくれるよ」

「あたし…」

梨々香は身を乗りだし、

「その娘さんと同級生なんですよ。ほら、佐伯良子さん！彼女とはクラスが違うんですけど、かわいい人ですよ。同じ女なんだけど、憧れるなあ」

手を組み、少し空を見上げながらも、梨々香はお婆さんの反応を見ていた。

梨々香の言葉に、お婆さんは首を傾げた。

「佐伯…良子？佐伯良子…」

少し考え込んだ後、お婆さんはぽんと手を叩いた。

「ああ！」

「知ってます！やっぱり、かわいいですよ。おば…お姉さんもそう思うでしょ？」

思わず、言い間違いかけた梨々香に気づかずに、お婆さんは言葉を続けた。

「佐伯真子ちゃんのことだね。今年、高校受験だって、奥さんが言ってたわ。志望校が、ここから遠いから、大変だって言ってた、言ってた」

「佐伯真子…」

梨々香は、さつき確認した表札を思いだし、

「妹さん？ち、違います！その子のお姉さん！」

「はて…お姉さんなんていたかな？」

お婆さんは、考え込んだ。

（ボケてんのかよ）

心の中で毒づいたが、口に出すことはない。

梨々香はさらに笑顔をつくり、

「ほら！この近くの大月学園に通う女の子ですよ」

「大月学園？」

お婆さんは首を捻った。

「近くにあるでしょ」

梨々香は、場所まで説明しだったが、お婆さんはただ…眉を寄せ、首を傾げるだけだった。

「お婆ちゃん」

ついにお婆ちゃんと言った梨々香は、学園の方を指差した。

「ここからでも見えるでしょ！校舎が」

梨々香が指差す方に、目をやったお婆さんは、一応眼鏡をかけ、確認した。そして、大きく息を吐き、

「何言つてんだい。大きなマンションが建つてるだけじゃないかい。どこに、学校があるのさ」

「え？」

梨々香は自分が指差した方を、凝視した。

自分が今までいた大月学園が…なんとか見えた。

まるで、蜃気楼のように揺らめきながら。

そして、お婆さんが言ったマンションの姿が、それに重なり…時折、学園よりもはつきりと存在を誇示することがあった。

「何じゃ〜こりああ！」

思わず、煙草を握り潰し、梨々香は頭を抱えた。

そう…真の事件が始まったのだ。

「チッ」

高坂は、伊集院が飛び去った旧校舎の方へ走りながら、カードを手にした。

「舞！聞こえるか！佐伯さんの家を探るのは、後回しにしてくれ！」

高坂はカードを、耳に当てると、

「直ちに、上空から見た学園全体の映像を、こちらに流せ！」

指示を飛ばした。

「部長。監視衛星は、一つではありませんよ。学校から半径3キロなら、あたしが作ったみるみるくんが、カバーしてくれます」

情報倶楽部の部室の中で、布団にくるまれながら、パソコンのマウスを忙しなく動かし、舞はにやつと笑った。

「みるみるくん！GO！」

監視式神からの映像をライブでとらえた舞は眉を寄せ、気になる部分をクリックした。

ディスプレイに映ったのは、ぐったりとした女生徒が、何かに釣られたように、体育館の上を飛び越えていく様子だった。

その動きは速く…一瞬しかとらえられなかった。

「部長…。今のは何ですか？トリック体験学習部のパフォーマンスですか？」

「違う！」

カードから、その様子を見ていた高坂は、伊集院が消えた方向を確認していた。

「舞！お前は、今の映像を分析しろ！映像は1人だが、目視では2人いる」

「どっという意味ですか？」

舞は一応記録した映像を呼び出すと早速、カーソルを女生徒に持っていた。

しかし、何度調べても、そこからは何も見つからなかった。

「彼女達が消えた方向は！」

高坂はカードをしまうと、体育館から東校舎横を走り抜け、特別校舎を通り過ぎると、裏門を抜けた。そして、道を挟んで立つ…もう一つの校舎を見つめた。

「旧校舎」

旧校舎。普通科しかなかった時代…学園はもともと、そこにあった。

今の学園の場所には、理事長である黒谷の家と、祠があった。

しかし、祠は地下に隠され、新しい学園が建てられたのだ。

それは、何年も前の話であり、祠があったことを古くから周りに住む人達も、知らないくらいであった。

存在を消すようにしながら、なぜ…旧校舎だけは取り壊さなかったのか…。

「バグ校舎か」

高坂は、裏門と旧校舎の間で立ち止まった。

高坂がこの世界に来た時、旧校舎はなく、そこは空き地であった。

しかし、祠に封印されていた女神ムジカが復活し、討伐された後、突如として旧校舎は現れたのである。

舞が、防衛軍の極秘ファイルにアクセスし、調べたところ…祠を地下に移動する為に、なにがしらの人柱的な力を使ったと書かれてあった。

その力を使った場所こそが、旧校舎らしいのである。

（人柱？あそこにいた誰かか？それとも…）

実世界から来た高坂には、この辺りの伝承は謎が多すぎた。

（いくか）

高坂はカードを取りだし、旧校舎上空からの映像を見たが、映っていない。

結果を張っているからであった。

「映らないか」

高坂は、フツと笑うと歩き出した。

「部長！」

カードから、舞の声がした。

「入れるんですか？」

「ああ……」

高坂は頷いた。

すると、カードに手書きの旧校舎の見取り図が転送されていた。

「お気をつけて」

舞の言葉に、高坂は大きく頷いた。

「ああ」

旧校舎は、Uのような形をしており、真ん中はグラウンドになっていた。

校舎全体は、倒壊を警戒してか、金網のフェンスで補強されていた。そんな建物だから、生徒の殆どは近づくことはない。

いや…近づけなかった。

なぜならば、旧校舎が見えるのは…ほんの数人だったからだ。

歩き出した高坂の後ろ姿を、裏門にもたれて見送るものがいた。

情報倶楽部顧問、前田絵里香であった。

「見えない。触れない。近付けないものを、注意はできないからな」

前田は煙草を吸いながら、目を細めた。

彼女には、旧校舎が見えてなかったのだ。

カードをかざし、魔力を発動させても、反応がない。

「教師なら止めるべきだが…」

カードのディスプレイに映っていた高坂が消えた。

「情報倶楽部顧問としては、行かすしかないな」

前田は煙草をくわえると、腕を組み、高坂の帰りを待つことにした。

一人ヶ原

江戸から、明治に向かう混乱の時代。

大層な金持ちの屋敷に、1人の少女がいた。

少女は、この屋敷の主人の娘であったが、正妻の子供ではなかった。所謂、隠し子であったが、10歳の誕生日を迎えた。ある日、突然屋敷の主人の使いの者達が来て、少女を産みの母親のもとから引き裂いた。

跡取りが産まれなかった故に、少女を引き取りに来たのだ。

いや、引き取るとは違つかもしれない。

幕府から、維新政府に変わる動きの中で、父親である主人は、維新政府と繋がりを持つために、少女を…とある役人との間に、婚約という形で捧げることを決めたのだ。

母親から引き離され、しばらく泣くだけの日々だった少女は、ある日から泣くことをやめた。

その代わり、よく笑うようになったのだ。

それも、夜中に。

深夜になると、少女の部屋から漏れる笑い声を、気持ち悪がり、もっとも恐れたのは、正妻でした。

もともと、少女の存在を快く思っていなかった正妻は、ある夜…お手伝いの1人に、少女の部屋を覗きに行かせました。

恐る恐る…障子に影が映らないように、少女の部屋の中を覗いたお手伝いは、息を飲みました。

部屋の中には、少女しかおらず、それも布団に入らずに、真ん中で正座をし、楽し気に笑う少女がいただけでした。

その報告を受けた正妻は、首を捻りました。

それから、深夜…少女の笑い声は止まることはありませんでした。

それからまた、時は過ぎた…ある日。

酒に酔った屋敷の主人が夜中に、偉く上機嫌で帰ってきました。

屋敷の者に土産を振る舞った後、主人の耳にいつもの如く、笑い声が飛び込んで来ました。

酔っぱらってやつは、わかりません。

途端に機嫌が悪くなり、主人は少女の部屋に向かうと、障子を開け、中に入りました。

その瞬間、少女は笑みを拭い、主人の方に顔を向けました。

その目は、自分の父親を見る目ではありませんでした。

まるで、親の敵を見るが如く。

そして、少女の目を見た父親は見たのだ。

化け物を。

恐ろしい化け物を。

それは、血塗れの獣の体に、父親である自分の顔がのっていたのだ。

自分の顔をした化け物。

金と権力にまみれた化け物。

主人の酔いは一気にさめると、部屋から飛び出し、どこからか刀を持ってくると、再び少女の部屋に行き、

「化け物め！」

自分の顔をした化け物を斬った。

しかし、話はそれで終わらない。

主人は気が狂ったように、屋敷にいた妻も、お手伝いも…すべての人間を斬り殺した。

そして、最後に、自分の首をかき斬って、死んだ。

「それが、1人ヶ原という話だそうです」

後ろに控えるユウリとアイリの話聞き終えて、リンネは荒れ地に立ちながら微笑んだ。

「そう」

「チツ」

軽く舌打ちすると、高坂は旧校舎の下駄箱が並ぶ玄関を突っ切り、校舎の一番裏に足を踏み入れた。

まるで刑務所のような高い塀があり、その前に、それはあった。

なぜ、そこに来たのか…高坂にもわからなかった。

「その屋敷は、ここにあつたらしいです」

「そう」

リンネは、振り返った。

真後ろには、大月学園があった。

1人ヶ原の屋敷は、ちょうど旧校舎の辺りにあったらしい。

そして、その時死んだ少女の墓と言われる祠が、旧校舎の裏にあると言われていた。

他の屋敷の者は、他の場所に葬られたが、少女の死体だけは、屋敷から動かせなかったという。

屋敷は焼かれたが、少女が死体は燃えずに、気味悪がった人々がそのまま、土を被せ、墓としたのだ。

だから、今も…祠の下を掘れば、少女の死体が出てくると言われている。

まったく変わらない姿で。

そんな迷信を信じる気にはなれなかったが、この学園には、そんな話が多い。

新たに校舎を作った時も、土の中から、変なケースが出てきたし。

それを、科学信仰部がエックス線を当てて、分析したら、少なくとも平安時代のものだとわかった。

そのケースは、実世界の新聞部のどこかに保管されているはずだ。

「……まったく、それにしても、こんな気味悪い祠がある場所に、学校をつくるか？」

高坂は、盛り上がった土に、ちよこんと鎮めのお地藏さんを置いただけの1人ヶ原の祠の前に立った。

旧校舎の裏には、祠以外なく、2人が隠れる場所はない。

「やはり……校舎の中か？」

一応、見落としてるところがないが、調べようと祠に近づいた時、高坂の携帯が鳴った。

「携帯？」

鳴るはずがないものだった。

実世界からたまたま持ち帰ったものであったが、ブルーワールドでは無用の長物であった。

その携帯が鳴った。

それも、死んだ兄の番号で。

「はい」

高坂は気を引き締めると、電話に出た。

兄の携帯を持っていると考えられるのは、一人しか思い浮かばなかった。

いや、一人と言っているのか。

電話の向こうで、かけてきた主は無言で微笑んだ後、間を開けて話し出した。

「あなたなら、出ると思ったわ」

「き、騎士団長リンネ！」

電話の主は、炎の騎士団長：魔神リンネであった。

「簡潔に言っわね。いい女に暇はないのよ」

と自分で言って、フフフと笑った後、リンネは言葉を続けた。

「最近、こちらの世界で、人間の夢がなくなっているの」

「はあ？」

唐突な話に、高坂は眉を寄せた。

「その後、人もいなくなる」

「何の話をしている？」

「知ってるかしら？学園の裏に、1人ヶ原と言われる心霊スポット

があることを、昔…屋敷があつて」

「何を言っている？学園の裏は、旧校舎で、その前は黒谷の邸宅だ」
思わず、自分の話を遮った高坂に、リンネは笑った後に、ゆっくりと目を細めた。

「思っていたより、頭が悪いわね。ここあなたがいる世界は違うわ。例えば、裏表でもね」

「！」

リンネの言葉に、高坂は目を見開いた。

「失踪した人間達は、学園の近くで消えている」

「な」

「言いたいことは、それだけよ」

電話を切ろうとするリンネに、高坂は慌てた。

「ま、待て！」

しかし、携帯を耳元から離し、切ろうとした時、思い返したように、リンネは再び携帯を耳元に当てた。

「言い忘れていたわ。彼の携帯…着信はたくさんあるのに、アドレスは2件しかないわ。あなたと…妹さんかしら」

最後にそれだけ言うと、リンネは携帯を切った。

「リンネ様」

後ろでずっと控えていたユウリが、口を開いた。

「なぜ、人間にそのようなことを」

ユウリの質問に、リンネは肩をすくめ、

「意味はないわ」

携帯をしまった。

「人間の悪霊如き。我々の炎ならば」

アイリは頭を下げながら、地面を睨んだ。

「教えると助けるは、違うわ」

リンネは、歩き出した。

「それに、人には強くなって貰わないと、困るから」

そして、クスツと笑うと煙のようにその場から消えた。

ユウリとアイリも、頭を下げたまま、消えた。

その2分後、相原理香子と月影のメンバーが来たが、リンネ達を目にすることはなかった。

「最近、学園の周りで失踪事件が多いわ。パトロールを強化しよう」

理香子の言葉に、月影のメンバーは頷き、それぞれに分散して行った。

「向こうの世界とつながる携帯…。失踪者。夢…」

祠の前で、顎に手を当てて考える高坂。

「夢か…。そういえば昔、なりたいものがあつたな」

その時、後ろで草を踏みしめる音がした。

無意識に振り返った高坂は、5メートル向こうに立つ者を見て頷いた。

「そうそう！これだ！でも、こいつじゃない。これは、見た瞬間、泣いてしまったな」

しみじみと昔を思い出していた高坂は、途中ではっとした。

「どうして！仮面。イダー。ンが、いるんだ！」

バツタに似たグロイ生物がいることに、高坂は絶句した。

しかし、驚いている暇はなかった。

そのバツタに似たグロイ生物は、突然飛び上がると、空中からの蹴りで、高坂に飛びかかってきた。

「あり得ん！」

高坂は逃げることをせずに、前に低く飛ぶと前転した。

高坂の頭上を蹴りの体勢のグロイ生物が、飛び越えていく。

「どうなっている！」

高坂は急いで立ち上がり、振り返った。

「高坂くん。席について」

また後ろから声がしたので、振り返ると…高坂の目に、教壇の後ろに立つ教師の姿が飛び込んできた。

そして、周りには…クラスメートがいた。

「！」

状況判断しようと、周囲を確認する高坂に、教師は笑顔で言った

「よつこそ、当学園へ」

にここに笑う教師に、意識が言ってしまう…高坂はすぐに気づかなかった。

クラスの全員が笑っていることに。

桃源郷

(チツ)

心の中で舌打ちしながら、高坂は机に座り、頬杖をついていた。

周りにいる見知らぬ生徒達。

制服はばらばらで、人種もばらばらであった。

なのに、言葉は通じていた。

人間の言葉は、単一であるブルーワールドにいるから気にしていなかったが…明らかに、実世界の中国語や英語を話している者もいるのに、頭に入ってくるのだ。

(ある種の魔法か？脳波や波長、もしくは思考を分析して解析する。いや、わからん。舞とつながれば)

高坂は席を立つと、カードを確認した。通信はつながらない。

少し歩き、教室の窓のそばにいくと、一応携帯を開いた。

「オウ！高坂くんは、携帯をお持ちなんですね。ということは、僕と同じ世界から来たんですねえ」

後ろから声をかけられ、高坂は少し眉を寄せた後に、振り返った。

180センチはあるひよろ長の白人が、立っていた。

着ているのは制服ではなく、世界征服と漢字でプリントされているTシャツであった。

「しかし、この世界で、携帯はナンセンスね！なぜならば…」

世界征服は、ここで言葉を溜めた後、

「携帯会社がないからよぉ」

と言い、両手を広げた。

「…」

高坂は携帯をしまつと、前を向いた。

窓から見えるのは、日本の住宅街だ。

「オウ！高坂！」

世界征服は高坂の隣に來ると、窓を開け放ち、

「あなたには、何が見えますか！僕には、学園の外がすべて、アキバに見えますうう！オウ！ワンダフル！」

世界征服の言葉に、高坂は目を見開いた。

「何？」

そして、世界征服の横顔を見ようとした。

その時、教室の扉が開いた。

「ビバ！下着！ビバ！天国！僕はとうとうたどり着いたのですね」

そして、扉の前で涙を流しながら、敬礼する輝の姿が、目に飛び込んできた。

「下着姿の女性ばかり！世の中、軽装だ！いつそのこと、もう一枚くらい！」

エロイ顔で、教室を見回す輝に向かって、高坂は歩き出した。

「こ、これはこれは！ナイスバディのお嬢さん！」

近付いてくる高坂の胸と下を交互に見る輝。

「高坂パンチ！」

そんな輝の顔面に、高坂は拳を叩き込んだ。

「見れた！た、谷間！」

満足気に後ろに倒れる輝は、後頭部を廊下にぶつけると、はっと目を覚めた。

「ぶ、部長！？」

目の前に立つ高坂を認識した輝は、一応下から上まで確認してから、こう言った。

「ま、まさか！女装の趣味がおもちで」

「うるさい」

高坂は倒れている輝の腹に足を乗せると、教室の外に出た。

「ボーイ、大丈夫かい？」

世界征服は輝の前に来ると、手を差し伸べた。

「部長！」

輝は無視して立ち上がると、高坂の背中を追って走り出した。

「オウ！ノオ！」

肩をすくめる世界征服。

「部長！」

「……」

後ろから輝が叫んでも、高坂は足を止めない。

「どうしてくれるんですか！部長に殴られてから、下着の天使達がいなくなったじゃないですか！」

輝は目だけを動かし、周囲を確認し、拳を握り締めた。

「桃源郷が消えた」

そして、下を向くと、思い切り…肩を落とした。

「ぶ、部長のせいだ!」

抗議しようと顔を上げた瞬間、輝は高坂の背中にぶつかった。

「な!」

思わず絶句した高坂が、足を止めたからだ。

「部長?」

輝はよろめきながらも、前を見た。

笑顔で談笑しながら、高坂達の横を通り過ぎていく…大月学園の制服を着た女生徒達。

「さ、佐伯良子!?!」

輝は思わず、目で女生徒達の動きを追った。

「あり得ん!彼女は!」

高坂が振り向こうとした瞬間、前から声がした。

「お兄ちゃん」

その声が、耳に飛び込んできただけで、高坂の息が止まり、心臓も止まりそうになった。

「ば、馬鹿な…」

何とか絞り出した言葉は、状況を認めてはいなかった。

「お兄ちゃん」

二度目の呼び方で、高坂は震えながら、前を向いた。

「いくら、父さんと母さんが離婚して、別々になったからといっても、お兄ちゃんはお兄ちゃんなんだからね」

「り、涼子」

膨れ顔の女の子を認識すると、高坂の左目から一筋の涙が流れた。

「真お兄ちゃんも、流お兄ちゃんも、ずっとわたしのお兄ちゃんだからね」

それだけ言うと、涼子は高坂から離れ、手を振りながら廊下の角を曲がった。

「部長の妹さんですか？可愛いですね。あまり部長と似ていないですね。よかった」

「涼子」

輝の話は、高坂の耳に入ってこなかった。

同級生達の手によって、植物人間となった涼子は…兄である幾多流の手によって、延命装置を取られ、亡くなった。

原因をつくった生徒は、幾多によって殺された。

「あり得ん」

と呟きながらも、高坂は涙を拭わなかった。

「あり得ない」

その言葉だけを何度も、呟いた。

「そ〜う！あり得ない世界ね」

世界征服は、深々と頷いた。

「だけど〜あり得ないから、失いたくない世界よ。ここは」

教材を手に、廊下を歩く女教師は、微笑んだ。

「あなたは、逃げれない」

女教師は、ちらっと廊下の窓から下を見た。

校舎と校舎の間に、祠が祀ってあった。

「ここはもう…一人ヶ原ではないわ」

女教師は、口元を緩めた。

その頃、裏門にもたれて、煙草をふかしていた前田の前に、2人の生徒が近付いて来た。

「来たか」

前田は、煙草を携帯灰皿にねじ込んだ。

「ここに、校舎があるなんて…知りませんでした」

「すまないな。あたしには、見えないんだ」

前田は、軽く右肩をすくめてから、2人の生徒を見た。

「ということは、お前には見えるんだな？生徒会長」

近付いてきたのは、九鬼真弓とさやかであった。

「何とかですけど」

九鬼は、朧気に見える旧校舎を見上げた。

「先生。一応、各倶楽部に問題提議だけをしましたけど」

さやかは、新聞部顧問でもある前田を見た。

「う」苦労さん」

前田は、見えない旧校舎を見上げ、

「認識さえさせれば、見えるかもしれない。こいつがな」

目を細めた。

「行きます」

2人を置いて、九鬼は歩き出した。

旧校舎に向かって。

諸君

「諸君！我々は一度、失った！しかし！」

誰もいない校庭の真ん中で、1人軍服を着た男が叫んでいた。

「我々は再び、鬼畜米国に戦いを申し込む！そして、今度こそは！国民すべての命を捧げて」

力説する男の首が突然、飛んだ。血飛沫を上げながら。

「違う！違う！」

首がなくなった男の前に、サーベルを手にした白人の男が、着地した。

「世界を征するのは、白人だ！それも、我々ゲルマン民族が相応しい！」

サーベルについた血を見つめながら、刀身に映る顔がにやけた。

「カカカカ」

小気味よい笑い声を上げる白人の横を、正門から入ってきた九鬼が横切っていく。

そして、前のめりに倒れた軍服の男の前で、足を止めた。

「黄色人種が、我がそばを！」

白人の男は振り向きながら、横風にサーベルを振るった。

しかし、次の瞬間、白人の男は絶句した。

振り返りもしない九鬼が、指先だけでサーベルを止めたからである。

「…」

九鬼は無言で、軍服の男を見下ろしながら、サーベルを引くと白人のバランスを崩し、そのまま回し蹴りを白人の男の腹に叩き込んだ。

「うぎゃあ!」

白人の男はふっ飛び、思わずサーベルを離れた。

「どうなっている?」

九鬼は指先でつまんだまま、サーベルを地面に突き刺すと、眉を寄せた。

「今度こそ、我々は!勝つのである!」

何故ならば、軍服の男が再び立ち上がると、演説を始めたからであった。

いつのまにか、首から上が復活していた。

「こいつらは…」

「死んでいるのか」

九鬼が言おうとした言葉を、校庭の端から歩いてくる男が続けた。

「？」

九鬼は、男を見た。

長身で背中まである黒髪を靡かせた男は、学生服を着ていた。

「ここは、死者の学校か？」

九鬼は、学生から殺気を感じなかったが、本能から構えた。

「半分は正解」

学生は、軍服の男を挟んで、九鬼と向き合う位置で足を止めた。

「半分だと？」

九鬼は、腰を屈めた。

その様子を見て、学生は両手をポケットに入れた。

「答えを知ったら、ここから帰ってくれるかい？九鬼真弓……いや、デスペラードよ」

「デスペラード！？」

九鬼がその言葉に驚いた瞬間、学生は身を屈め、地面を蹴ると、一気に九鬼の胸元に飛び込んで来た。

「な」

反射的に、後ろに飛んだ九鬼の目に、ポケットから飛び出す手刀が見えた。

余裕で避けられる。そう思った瞬間、九鬼の体に痛みが走った。

「流石ですね。深く斬り裂く予定でしたのに」

残念そうに呟いた学生の手には、日本刀が握られていた。

「い、いつのまに」

九鬼は、制服を斬り裂き、腹に走った傷を指で確認した。

「わかりましたか？これが、ヒントです」

「！？」

九鬼はさらに、絶句した。

学生の服装が、変わっていたからである。

「新撰組」

背中に誠を書かれた着物は、間違いなく幕末の有名な剣士達の姿であつた。

「これで、驚いて貰つては困りますよ」

学生は鞘に、日本刀をしまうと、今度は両手を前に突き出した後、腕を引き、腰を屈めた。

「かゝめゝは」

「!？」

信じられない力を感じ、九鬼は横に飛んだ。

「は！」

前に突き出した手のひらから、光線が放たれた。

光線は、正門にぶつかり、目映い光とともに爆発した。

「やはり…メジャーどころは、知られていますね」

避けた九鬼が、勢い余って校庭の端にある体育館内に転がり込んだのを確認して、学生は肩をすくめた。

「中に入りましたか。仕方ありませんね。今なら、出れましたのに」

学生の姿が、もとに戻った。

「強者程…ここでは生きれませんよ」

学生はため息をつく、背を向けて、来た道に戻って行った。

「黄色人種が！」

学生の後ろでは、再び演説する軍服の男に切りかかる白人の惨劇が、繰り返されていた。

「く！今のは一体」

九鬼は一回転すると、体育館内に着地した。

そして、学生の方へ振り返ろうとした瞬間、背中に悪寒が走った。

「な！」

慌てて振り返った九鬼の目に、乙女ブラックが飛び込んできた。

「乙女ブラック…いや、違う！」

九鬼が構えるよりも速く、敵は接近してきた。

「乙女ダーク」

体育館の床の滑りを利用して、九鬼は後ろに下がった。

乙女ダークの蹴りが、鼻先を通り過ぎた。

九鬼は避けながら、スカートのポケットから、眼鏡ケースに似たものを取り出した。

「装着！」

九鬼が叫んだ瞬間、眼鏡ケースが開き、眼鏡とともに黒い光が九鬼を包んだ。

「は！」

乙女ブラックになった九鬼は、今度は床を蹴ると空中で身をよじり、鞭のようにしならせた足を乙女ダークの顔面に叩き込んだ。

すると、乙女ダークの顔にかけてあったサングラスが飛び、変身が解けた。

「デスペラード」

九鬼は着地すると、改めて自分そっくり女を見た。

女は悔しそうに、九鬼を睨み付けながら、その姿を変えた。

姿だけではない。

体格も、骨格も変えた。

九鬼を見下ろす巨体よりも、赤髪の中から飛び出している日本の角が印象的であった。

「どうなっている？」

その見た目は、天空の騎士団長…サラであった。

「どういことだ」

九鬼は、サラの魔力を感じ、身震いした。

「うん？」

廊下を歩いていた高坂は、足を止めた。

「どうしました、部長？」

隣を歩いていた輝も、足を止めた。

「…今、凄まじい気を…感じたような…一つだけだが」

「え！そうですか？」

普通ならば、式神を身に宿している輝の方が、敏感である。

輝も一応、気を探ってみたが、何も感じなかった。

「それよりも、部長！ここの謎を解きましょう！やはり、死者がよみがえる場所で、生者にはバラダイスを見せる…面白い世界ではないでしょうか」

「フッ」

高坂は笑うと、再び足を進めた。

「部長」

自分の横を通り過ぎた高坂を、輝は目で追った。

「それだけでは、吸血鬼のようになった伊集院くんの件を説明できない」

高坂は、バラバラの格好をした生徒達を見、

「調べるぞ」

歩く速度を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8198x/>

天空のエトランゼ～脳髄の微笑み編～

2011年12月3日17時55分発行